

会議概要

件名	第3回鹿児島市文化芸術推進基本計画策定委員会
日時	令和3年3月24日（水） 15時～16時55分
場所	鹿児島市役所本館2階講堂
出席者	文化芸術推進基本計画策定委員会委員15名、事務局6名
会次第	1 開会 2 議事 (1) 文化芸術に関する市民意識調査報告書について (2) 本市の文化芸術に関する取組について（第2期文化薫る地域の魅力づくりプランに基づく取組を含む） (3) 鹿児島市文化芸術推進基本計画骨子案について 3 その他 4 閉会
主な意見等	<p style="text-align: right;">（○…委員、⇒…事務局）</p> <p>2（3）鹿児島市文化芸術推進基本計画骨子案について ※グループに分かれて意見交換を実施。主な意見は以下のとおり。</p> <p>【グループ1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○策定の目的には協働・連携も盛り込む必要がある。 ○新しい文化芸術への「配慮」や「考慮」という言葉は上から目線の表現になる可能性がある。 ○そもそも文化芸術に「土壌」というものがあるのか考える必要がある。 ○大前提として本市の文化芸術とは何か問う必要がある。 ○鑑賞率の高いジャンルなど文化芸術に優先順位はつけられないため、中心となる柱をもうけるか検討が必要。 ○長期的な視点とあるが期間が曖昧。鹿児島市の掲げるSDGsの目標達成期限の2030年は長期的な視点にあたる。持続可能な開発、発展の視点が大切。 ○令和5年度は全国高校総合文化祭と国体が同じ年に開催されるよい機会になる。 ○身近なところで文化芸術に触れる機会の充実という観点から、公民館の価値やその利用方法についても再考する必要がある。（現状の公民館は利用者層が限定的になっているため。） ○文化芸術活動の継続や低い敷居を設けるため、甲子園の21世紀枠を設けるような観点が重要である。 ○地域伝統芸能の担い手の育成を意図して、日常と芸術を仲介するメンター（指導者、助言者）並びに中間支援組織が重要である。 ○③子どもが文化芸術触れるとあるが、子供だけの文化祭等、子ども自身が文化芸術の機会を創出する機会が重要である。 ○既存の文化芸術の範疇からこぼれ落ちる表現活動も文化芸術として認める寛容さが必要である。特に近年の芸術表現は5年・10年で一新しているため、それらも取り入れていく必要がある。その際には、文化芸術という言葉の使用を今後検討する必要がある。また、ポップカルチャー等の言葉も用いる必要がある。 ○文化芸術を楽しむことと本質に触れることの両輪で進めたらよいのではないか。 ○②文化施設の効果的な運営と情報の発信は後ろの方でもよいのでは。 ○かごしま文化情報センター（KCIC）は場所自体の認知度アップを目指すことが必要である。

【グループ2】

- K C I Cが文化の総合窓口となり、関心がない人にも届く情報発信の方法が必要。
- K C I Cの機能の充実を図るべき。予算面でも少ないのではないか。
- 子どもの頃の体験がルーツとなり、表現へと結びつきやすい。そのために学校教育との積極的な連携が重要。
- 学校では生徒にタブレットを配布するなど情報のオンライン化が進んでいるが、効果的な発信には紙と両方の媒体が必要。紙にQRコードを付ける等の工夫も考えられるので、K C I Cの情報も両方で発信していくべき。
- 地域の伝統文化は行事だけでなく、授業に組み込むなど継続的に実施・活動することが大切。他分野と連携するにはコーディネーターが必要。
- 地域の中で発表する場が少ない。身近な場所（空き家やサロンなど）で発表することにより担い手育成にもつながる。
- 文化芸術活動団体が趣味の範囲から一歩踏み込んで、社会と積極的に関わることが重要。分野を越え連携を育み、まち全体の文化向上を目指す。
- 徳島県神山町でのアーティストインレジデンス事業では外から来た作家が地域資源を発見するような取組があり、地域文化を見直す機会になっている。外部の人がもたらす新たな視点は大切。

【グループ3】

- 市内には全79小学校区に地域コミュニティ協議会があり、約50団体近くの伝統芸能の保存会がある。13校の小中学校では運動会等で伝統芸能が発表されている。向陽小学校では虚無僧踊りと棒踊りの両方を取り入れて実施されている。
- K C I Cが50の保存会と連携して教育と文化のコラボレーションがはかれたらよいのではないか。
- 海外の方に鹿児島島の祭りの敷居を低くして気軽に触れてもらうことで外の視点から評価してもらってはどうか。
- 伝統芸能の保存は地域で取り組まれたらよい。例えば地域コミュニティ協議会等が関わったらよいのでは。
- 高齢者施設にいる方が伝統芸能の継承者ご本人であったりするので、そのような施設でも披露したりできる。
- 実行委員会で実施してきた“T S U N A G U和の世界”は始まったばかりなので腰を据えて取り組んだらよい。
- 文化団体にとっては、自分達だけの活動ではなく他分野と連携するためには実行委員会のような場があったらよい。

【グループ4】

- 文化情報の発信は市のL I N Eなど、公式な方法で市民個人々の自主的な企画を発信できると情報の信用度が高まり多くの人に目にしてもらえる。P U S H型の情報発信が必要。
- 高齢者を中心に市の広報紙がよく見られている。年齢や属性に応じた情報発信としてアナログとデジタル両方が必要。
- 大きなイベントでなくてもストリートピアノで演奏されるなど小さなイベントが駅やまちなかで頻繁にあると、街のにぎわいや予期せぬ出会いが増える。
- 文化芸術への関心は体験や活動するものの方が高い。鑑賞から活動や体験へどのように繋げるかは、間口が広く手軽であることが必要。
- 伝統芸能の担い手の育成は地域のコミュニティ協議会等と連携して進められたらよいのでは。連携するにあたって専門家がいたらよい。
- 外国人は鹿児島独自のものを体験したい。英語での案内も含め受入側の取組も重要。
- アートの視点を福祉施策等に取り入れるなど異業種交流のような場も必要では。

3 その他

○各グループでの意見については次回の計画素案へ反映するよう検討する。

○第六次総合計画の基本目標で文化は「子ども・文教政策」の中にあると思うが、第五次総合計画では「まなび文化政策」となっていた。上位計画である総合計画の中で文化面が縮小しているように見える。

⇒縮小しているということはなく表現が変わったものである。